

令和 6 年 10 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2018～2023

課題番号：17KK0026

研究課題名（和文）文物考古資料による唐～宋オルドス地域の歴史的構造の研究

研究課題名（英文）Research on the historical structure of the Ordos region during the Tang-Song period using cultural artifacts and archaeological materials

研究代表者

村井 恭子（MURAI, KYOKO）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：50569291

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,800,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、7世紀から12世紀（唐宋時代）にかけて中国のオルドス地域を拠点とした遊牧民勢力の実態と、その軍事力によって活性化したユーラシア東部地域の政治・社会を再構築するという基課題を継続するものである。とくに漢語史料に関して、近年発見された石刻をはじめとする史料を現地調査し、これらの史料の公表を通じて日本における関連分野の停滞を解消するとともに、これらの史料から唐宋時代のオルドス地域の状況や当該地域の遊牧民勢力の実態を明らかにすることを目的とした。本研究は新型コロナウイルスの発生により大幅な計画変更を余儀なくされたが、最新の発掘情報をもとに史料を整理・更新し、研究成果を発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来日本の関連分野でそれほど注目されていなかったオルドスの遊牧民、とくに吐谷渾・タンゲートの重要性を考察するため、その考察の基礎となる史料の収集・整理、および遺跡調査を行った。吐谷渾については周偉洲「吐谷渾墓誌通考」の翻訳および附録として関連情報を整理して公表し、吐谷渾研究の際の便宜をはかった。帰国後、国内で現地調査の成果報告を行い、同時にコロナ後の現地調査の手法などの情報提供も行った。また最新の考古発掘情報をもとに、従来知られていた延州吐谷渾部落のルーツを指摘し、さらに新出墓誌を使用して安史の乱後の唐の軍事力としての彼らの実態について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study continues an original project to reconstruct the reality of the nomadic forces based in the Ordos region of China from the 7th to 12th centuries (Tang-Song period) and the politics and society of the East Eurasian region that was revitalized by their military power. In particular, we investigated Chinese historical materials, including stone carvings discovered in China in recent years, with the aim of resolving blockages in related fields in Japan through the publication of these materials, as well as to clarify the situation in the Ordos region during the Tang and Song dynasties and the actual state of nomadic power from these materials. Although we had to drastically change our plans due to the outbreak of the new coronavirus, we were able to organize and update the historical materials based on the latest excavation information and present the results of our research.

研究分野：東洋史学

キーワード：遊牧民 石刻資料 吐谷渾 タンゲート 唐宋

1. 研究開始当初の背景

2000年以降、中国北朝～宋代史研究では、ラティモアの辺境理論（リザーヴァー論）や生態環境に注目した農業-遊牧境界地帯の概念を用い、伝統的な中国史観を批判し、華北一帯の遊牧勢力を軸とした中国史の再検討が盛んに試みられた。しかし、華北各地が均質だったはずはなく、気候・地形など地理的条件や、軍事力の育成環境、また中国王朝の辺境政策等により、華北内部においても相当の地域差が生じたはずであるが、このことはさほど意識されていなかった。また、華北のなかでも山西・河北地域に関心が集中し、次代の歴史の担い手を輩出したオルドスは等閑視されていた。

そこで基課題の基盤（C）「文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究」（2015～2017）では、6～8世紀の中国華北における古代トルコ系遊牧民研究、9～12世紀のオルドス地域に関係する敦煌文書・カラホト出土文書の古文書学的研究に携わってきた専門家二人を研究分担者に迎え、漢語・古代トルコ語・古代チベット語史料を用い、さらに中国王朝側・遊牧民側の双方向の視点から、オルドス地域を拠点とした遊牧諸勢力の実態と、また彼らの有する軍事力によって活性化されたユーラシア東部地域の政治・社会を再構成し、そしてそこからオルドス地域の歴史的意義を再確認するとともに、このオルドス地域を中心に研究材料の豊富な7～12世紀のユーラシア東部地域の歴史を叙述しなおすことを目的として研究を進めた。2015、2016年の2度にわたり中国で現地調査を行い、最終年度の2017年は国際ワークショップを開催し、リザーヴァー論について研究した早稲田大学石見清裕教授と北京大学栄新江教授をコメンテーターとして招聘した。このワークショップで得られた意見をふまえ、成果報告書を作成した。基課題における代表者の担当は、漢語史料の調査と、それを用いてオルドス地域のいかなる仕組みが歴史の転換をもたらす契機となるのかを考察することにあつた。本国際共同研究でも引き続きこの問題を検討する。

2. 研究の目的

上記ワークショップで申請者は「唐末五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料」を発表し、1) 2000年以降に公表された関連石刻史料およびそれを用いた研究を整理・紹介した。同時に日本の学界は、1972年の岡崎精郎のタング-ト研究以降現在までほぼ足踏み状態にあり、新出史料も全く認知され利用されていないという深刻な停滞状況を指摘した。また、2) 遊牧民の実態解明の初歩的分析として、唐末五代タングート拓跋政権（定難軍）幕僚の新出墓誌を用い貫籍・馬匹生産に注目し、オルドス・山西に分布した遊牧民と中国の官営牧場との関係を考察した。オルドス地域において、唐後半期に吐谷渾と思われる遊牧民の新たな小集団形成がみられ、それは中国の影響（漢化）を受けた形で表象されるが（例えば本籍を中国内地に設定したり、祖先を歴史上の有名人に附会したりするなど）、当該集団は遊牧部落体制をなお維持し、唐朝の監牧経営に関わり、唐末五代の動乱期には山西の沙陀政権・オルドスのタングート政権にそれぞれ吸収されていく状況を指摘した。

とくに1)の整理過程で、中国の地域規模の出版物・インターネット・修士論文等マイナーな経路で公表される新出石刻史料がまとまった規模で存在することが判明し、保存機関への実地調査が必要であると考えた。また、日本の研究停滞の原因の一つは、新出史料とそれを用いた研究とに関する情報収集の難しさであり、この点を解消せねばならない。そこで、本国際共同研究ではこれらの問題を解決しつつ、さらなるオルドス地域の居住民の実態・歴史機能面を考察する。

3. 研究の方法

渡航期間を2020年3月～2021年2月の12ヶ月とし、研究拠点を西安・北京に置き（受け入れ機関は北京大学）、海外共同研究者は市来弘志氏（陝西師範大学外国語学院のち同済大学外国語学院・外籍教師）と、栄新江氏（北京大学中国古代史中心・教授）であり、研究環境が最も充実している北京大学に訪問学者として受け入れてもらう。そして文献・石刻の漢語史料の調査、すなわち(1) 榆林市・府谷県・横山県の石刻調査、(2) 西安における石刻史料調査、(3) 北京大学・国家図書館における史料(石刻・文献・文書)調査を主とし、これらの調査を通じて得られた史料について目録の作成およびテキストの校訂を行い、データベースを構築して公開し、上述の日本における当該研究停滞の問題を解消する。また、中国国内で国際学会・全国規模の学会・若手研究者の学術討論会を通じ得られた成果について報告を行い、とくに若手研究者との積極的な意見交換を行う。

4. 研究成果

本研究活動は、後述のように新型コロナウイルスの世界的流行の影響を受け、中国への渡航が不可能となり、その後渡航可能となった後も、中国のゼロコロナ政策の影響・感染拡大による行動制限や、渡航期間の短縮などの理由で研究活動が大幅に制限されることになった。

2018年度は勤務の都合上、渡航せず準備期間として2名の共同研究者と連携して中国における研究状況や訪問先研究機関の情報を調査した。また中国浙江大学で開かれた唐史研究会の国際シンポジウムにおいて発表し、ウイグル可汗の継襲問題に注目して、石刻史料の情報との比較をもとに、伝世史料である両『唐書』や『唐会要』といった唐宋基本資料の情報伝達の傾向とその問題を指摘した。市来氏も西安の学会において農業-遊牧境界地帯に関連してオルドスの統万城や河西回廊の地理交通・生態環境問題について発表した。

2019年度は、年度末の渡航に向けて訪問を希望する研究機関との連絡・協力要請を行った。とくに陝西省考古研究所の関係者に同省内における調査協力を要請し、快諾を得た。さらに、タングートに関係する石刻史料の拓本の調査・収集を積極的に行っている寧夏大学西夏学研究院との連絡も取れ、研究所訪問および研究協力について快諾を得た。遺跡調査について市来弘志氏とメールで相談しリストアップした。また、基課題の成果報告書に掲載した唐・五代党項・吐谷渾関係墓誌の出土状況を整理した文章について、さらに最新の情報・修正を加えて増補版として中国の学術誌である『唐史論叢』に発表した。市来氏も引き続き統万城およびラティモアの辺境理論に関連するの学会発表を行った。しかし、年度末の渡航直前で、新型コロナウイルスの流行のために突然渡航不可能となった。さらに市来氏も日本に帰国中で中国に戻れない状況となった。やむを得ず、栄新江氏ほか中国にいる研究者と連絡を取り情報収集に努めた。

2020年度は、中国のゼロコロナ政策が一時功を奏し、感染が抑え込まれる状況となったため、渡航が可能となるか否かをうかがう状況が続いた。コロナ流行下でも行える作業として、市来氏と関連墓誌の目録作成を行う予定としていたが、折しも当該研究で著名な周偉洲氏(陝西師範大学教授)が吐谷渾墓誌の整理を行った論文「吐谷渾墓誌通考」を発表したので、栄新江氏の仲介を経て周氏に連絡を取り、日本語翻訳の許可を得た。さらに中国では吐谷渾に関して青海省都蘭熱水墓群や甘肅省武威吐谷渾王陵墓群において、新出墓誌を含む新たな発見が相次いでいたため、市来氏と共同で周氏論文の翻訳に加えて、解説・補注・附録を増補して吐谷渾墓誌目録・新出墓誌の録文および考古発掘の最新情報を追加して発表した。これによって2020年段階における吐谷渾関連情報(未公表のものを除く)の集約を日本の学界に提供しえたと考える。

2021年度も、西安市がロックダウンする状況となるなど新型コロナウイルスの流行が収束しなかったため渡航できなかった。市来氏も中国に戻れない状況だった。このため、メールなどの連絡手段を通じ、栄新江氏など中国人研究者から本研究に関する最新情報を収集することに努めた。上述のように中国における吐谷渾関連の遺跡・考古遺物の調査結果の公表が相次いだことから、中国の学界では大きな盛り上がりを見せていた。この状況について上記中国側研究者の助力のもと最新情報を収集・整理して国内学会において報告・紹介した。市来氏は日本国内において都城史に関する成果を学会発表および論文発表を行った。年度末に、北京大学から外国人研究者の受け入れが再開され、5月と10月のみ受け入れを行うという連絡があり、渡航準備を進めた。

2022年度は、ゼロコロナ政策のもと渡航手続きが煩瑣で時間が必要だったために10月の受け入れに合わせて渡航準備に努めた。しかし勤務の都合上、当初予定していた12ヶ月の渡航を6ヶ月に短縮せざるをえなくなった。また新型コロナウイルスの流行前に訪問を予定していた研究機関との約束もすべて無効となった。しかし、勤務の都合上これ以上の渡航延期はできなかったため、10月に渡航した。共同研究者の市来氏も1月渡航予定だったので共に現地を調査することにした。渡航後、栄新江氏からゼロコロナ政策のもと国内移動が非常に難しく、いったん外地に出ると北京に戻れなくなる可能性が高いため、しばらく北京大学内の資料調査を行うことを勧められた。しかし感染者増加で大学が封鎖され、宿舎で電子資料を調査するのみとなった。1月、ゼロコロナ政策が撤廃されたが、今度は爆発的な感染拡大で身動きがとれず、感染減少後は旧正月で帰省ラッシュとなり、外地調査は困難となった。この間、タングートの新出墓誌について調査した。これらについては当初データベースを作成する予定だったが、府谷折氏などの石刻は、高建国『宋代麟府路碑石整理与研究』(中国社会科学出版社、2021年)が出版され、拓本写真と録文が確認できるようになった。また2022年8月に杜建録・鄭文韜主編『党項と西夏碑刻題記』(全3冊、三秦出版社。以下『碑刻題記』)も刊行され、本研究に関わる墓誌24点が収録されていた。その他関連の史料集も刊行されたため、墓誌発見と史料集刊行および研究状況を整理して文章化することに変更した(作成中・未公表)。なお、杜建録らのものに関しては文末に基礎情報の目録を掲げておく(後継附録1「『党項と西夏碑刻題記』第1章掲載碑石目録」)。

2月後半、陝西省調査を計画したが、市来氏が渡航できず単独で調査することとなった。西安では新設の陝西省考古博物館や漢唐石刻芸術博物館などを調査した。陝西省の若手研究者の研究會を主催する西北大学裴成国副教授に会い、学界状況の聞き取りをした。また陝西省考古研究院王小蒙副院長に会い、近年の発掘状況の聞き取りをし、また榆林の新設博物館の調査にも協力してもらった。榆林への道中、塞門故城・宥州故城などを調査した。榆林では銀州故城および併設博物館・横山区博物館・古代石刻芸術博物館などを調査した。その後フフホトへ赴き、内蒙古博物院を参観した。

4月初、甘肅省・青海省を調査した。甘肅省博物館での調査後、武威へ赴いた。浙江大学馮培紅教授を通じ、涼州文化研究院の協力を得、吐谷渾慕容智墓と王族墓陵地を訪問した。また武威市博物館楊瑞館長に吐谷渾王族墓誌の状況を聞き取りし、現物も調査した。青海省では青海省博物館・西寧市博物館・伏俟城遺跡・熱水吐蕃墓群を訪問した。

学内業務のため、期間を延長して寧夏などへ調査することは断念して4月末に帰国した。この期間に、石刻史料の解読において重要な示唆を与えてくれる北京大学鄧小南教授の「試談五代宋初“胡ノ漢”語境的消解」の翻訳と解説を発表した。また唐後半期の党項に関わる既出論文について中国語化の要請があったため手直しと翻訳補助を行った。

2023年度は、上述の調査について、新型コロナウイルス流行後の中国における実地調査の状況やノウハウ等の情報も加え、東京大学で開催された第57回中国中古史研究会で「陝西省および甘肅・青海省の吐谷渾・党項関連文物遺跡の調査報告」を口頭発表し、この際、帰国中だった

市来氏にも参加を要請しコメントをいただいた。また関連する発掘報告および石刻史料をもとに、唐代史研究会夏期シンポジウムで「朔方軍解体期の朔方軍蕃部の動向」を口頭発表し、唐代の吐谷渾部落の状況変化や活動実態について論じた。本研究の目的の一つには中国の若手研究者との交流・関係構築も含まれたが、新型コロナウイルス流行のため、参加を予定していた学会活動自体が休止したり内輪でオンライン化したりと、これも大きく制限される状態だった。それでも、個人的に対面やメール等で直接情報交換を行ったほか、現地調査において協力してもらうなど、一定の関係構築に至ることができた。

■附録 1

『党項与西夏碑刻題記』第 1 章掲載碑石目録（全 24 点）

	碑刻名	刻石時間
1	静邊州都督拓扞守寂墓誌銘	唐・開元 25 年（737）8 月
2	右威衛大將軍拓拔駄布墓誌銘	唐・開元 16 年（728）7 月
3	延州安塞軍防禦使白敬立墓誌銘	唐・乾寧 2 年（895）
4	定難軍節度押衛白全周墓誌銘	後唐・天成 4 年（929）
5	李仁寶妻破丑夫人墓誌文	後唐・長興元年（930）
6	大唐之國碑	後唐・長興 4 年（933）
7	定難軍攝節度判官毛汶墓誌銘	後晉・天福 7 年（942）9 月
8	李仁福妻瀆氏墓誌銘	後晉・天福 7 年（942）2 月
9	定難軍節度副使劉敬瑋墓誌銘	後晉・天福 8 年（943）7 月
10	夏銀綏宥等州觀察支使何德璘墓誌銘	後晉・天福 8 年（943）4 月
11	綏州刺史李仁寶墓誌銘	後晉・開運 3 年（946）2 月
12	李彝謹妻里氏墓誌銘	後漢・乾祐 3 年（950）
13	綏州刺史李彝謹墓誌銘	後周・広順 2 年（952）
14	銀州都知兵馬使宋從實賣地石契	後周・広順 3 年（953）
15	綏州太保夫人祁氏神道誌	後周・顯德 2 年（955）
16	隴西郡李碑	北宋期
17	定難軍管内都指揮使康成此墓誌銘	北宋・乾德 4 年（966）閏 8 月
18	攝夏州觀察支使何公墓誌銘	北宋・開宝 2 年（969）11 月
19	龍鎮碑記碑	北宋・開宝 6 年（973）
20	定難軍節度使李光睿墓誌銘	北宋・太平興国 4 年（979）8 月
21	定難軍節度觀察留後李繼筠墓誌銘	北宋・太平興国 4 年（979）8 月
22	野利氏夫人墓誌銘	北宋・太平興国 5 年（980）3 月
23	管内蕃部都指揮使李光遂墓誌銘并序	北宋・太平興国 5 年（980）11 月
24	河南開封繁塔夏州番落都知兵馬使李光文施財題記	北宋初期

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 市来弘志	4. 巻 75
2. 論文標題 農牧境界線上の首都 統万城と関中平原の歴史地理的關係再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 郵政考古紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村井恭子、市来弘志	4. 巻 48
2. 論文標題 周偉洲「吐谷渾墓誌通考」（翻訳および解説・附録）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 147-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村井恭子	4. 巻 29
2. 論文標題 唐末五代鄂爾多斯及河東党項、吐谷渾相關石刻史料 研究狀況的介紹与考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 唐史論叢	6. 最初と最後の頁 396-420
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村井恭子	4. 巻 100-2
2. 論文標題 ウイグル可汗の系譜と唐宋漢籍史料 懐信と保義の間	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋学報	6. 最初と最後の頁 33-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 村井恭子
2. 発表標題 吐谷渾史研究の現状：新たな考古遺物の発見を中心に
3. 学会等名 第57回野尻湖クワリルタイ（日本アルタイ学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 長安城遺跡の新発見と現況
3. 学会等名 学習院大学東洋文化研究所東洋文化講座「古代中国研究の最前線 考古発見と歴史研究」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 鄂爾多斯地区到關中平原軍事交通路線小考
3. 学会等名 第五屆西安歷史文化國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 “農牧交錯論”的嚆矢 欧文・拉鉄摩爾的“貯存地”論
3. 学会等名 《日本学人唐代文史研究八人集》出版座談暨唐代研究國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 長安周辺の自然環境与游牧地区的關係
3. 学会等名 中華人文精神國際論壇（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 統万城遺址周围的植樹活動以及森林的恢復
3. 学会等名 黄土高原民衆生存狀態的歷史考察國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 統万城 農牧交錯地帶上的首都
3. 学会等名 2019年“一帶一路”西安歷史文化國際國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村井恭子
2. 発表標題 漠北回鶻可汗世系問題与唐宋漢籍 懷信与保義之間
3. 学会等名 中国唐史学会第十三届暨“唐代中国与世界”國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 統万城与長安城 河套地区与關中平原の地理關係再考
3. 学会等名 紀念統万城建都1600周年暨古代朔方文化研究國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市来弘志
2. 発表標題 画像磚上描繪的魏晉時期河西走廊的畜牧業
3. 学会等名 “一帶一路”西安歷史文化國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>第57回野尻湖クルルタイ https://toyobunko.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7576&item_no=1&page_id=25&block_id=47</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	市来 弘志 (Ichiki Hiroshi)	同済大学・外国語学院・外籍講師	陝西師範大学を2021年8月に退職。
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	荣 新江 (Rong Xinjiang)	北京大学・中国古代史研究中心・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中華人民共和国	北京大学			